

## 八面六臂とされる北村局長の背景

文春 3 月号 (p 236) で国家安全保障北村局長を八面六臂の大活躍として外交筋も驚いているという記事が掲載された。

この記事のネタ元は外務省だろう。

外務省は外交に加え国際情報機関としても確固たる地歩を築くことを省あげての目標としている。ライバルは警察庁。

評判がまずまずだった前任谷地初代局長が外務省出身であったことから、外務省としては警察庁出身の後任北村局長には冷ややかな感情を持っていた。国際情報機関としての評価を高めたい外務省としては、北村局長には早期に失格のレッテルを張りたかった。

それが 1 月の出だしに目覚ましい活躍ぶりだったことから驚いたというもの。

アメリカ WH での情報関係者面談中、予定外のハプニングでトランプ大統領と面談 (1 月 8 日、20 分弱)。急ぎ帰国し安倍総理の中東訪問に同行、その帰途一行と別れモスクワを訪問、プーチン大統領別荘で面談 (1 月 15 日、約 40 分)。9 日間隔で米ロ両大統領との面談と言う前例のない派手なデビューとなった。

米側から伝わってきたのも情報関係者とのプロフッショなやり取りへの称賛ときて外務省はうなったのだろう。

外務省の驚きはどうしてもいいが押さえておくべきことは以下の諸点だ。

先進各国はどこも外交ルートとは別に情報機関を通した情報収集・交換ルートを持っているということ。従って、外務省は外交ルートに加えて情報機関ルートを独占したというのは果たしてどこまで有効なのかと言う検討が欠かせない。少なくとも現状の外務省の人材育成ぶりでは情報機関としての道ははるかに遠いといわざるを得ない。

谷地、北村両氏の資質もさることながら、情報機関コミュニティーでの日本への期待は大きいということ。地政学的に中国に近く、この分野でのわが国の存在への期待が大きい。

北村局長の活躍に期待するが、それを支える足元の情報機関の育成は急務。

筆者：大貫啓行